

複合動詞における語構造分析の試み：構成要素「たてる」を中心に

著者	文 慶?
雑誌名	言語科学論集
巻	1
ページ	99-109
発行年	1997-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/30699

複合動詞における語構造分析の試み

—— 構成要素「たてる」を中心に ——

文 慶 喆

キーワード 複合動詞、動詞連用形、名詞化、意味的機能、強調化

要 旨 動詞連用形は名詞化する場合があり、これは複合動詞語構造の中でも同様である。この名詞化を、本論では品詞分類の形式的な問題ではなく、語構成構造の中で意味的な側面で捕らえる。本論では後項要素「たてる」を中心に分析を試みたが、その結果前項動詞の連用形が「名詞化する」と「名詞化しない」の二つの種類に別れることがわかった。それによって後項動詞「たてる」の意味機能が前項動詞が名詞化する場合には「意味の強調化」、名詞化しない場合には「確立、完成、結果の出現」になる。

0. はじめに

「動詞＋動詞」の形で代表される日本語の複合動詞は、その複合語になることによって単独で使われている場合とは異なる「意味の変化」が行なわれることがある。この「意味の変化」というのは、ある語の意味において「具体的な意味から形式的な意味」への変換等と考えられる。このことについては、斎藤(1992、1995)の中で「意味の抽象化、後項動詞の接辞化」として説明されている。本研究はこのような立場に立ち、複合動詞における語構造の分析を試みるものである。分析対象としては後項動詞「－たてる」を中心にするが、まず次のようなことから考えてみたい。

複合動詞の形式としては一般的に次のようなものが考えられる。

- (1) 名詞＋動詞： 旅立つ、腰掛ける、目立つ、跡付ける、上回る
- (2) 形容詞＋動詞： 多すぎる、近付く、若返る、近寄る
- (3) 動詞＋動詞： 貸し出す、取り上げる、打ち破る、飲み歩く

(1)、(2)、(3) のような複合動詞に限らず、複合語の品詞決定は後項要素によって決まることがある。

しかし、品詞の区別は絶対的ではなく、また各品詞間においては転成が行われることがあるので、次のような説はある程度有効である。

- (4) O. イェスペルセン：品詞には、形式、機能、意味（概念）の三つの側面があり、それぞれ分けて考える必要がある。（『文法の原理』ペ49-50）

すなわち名詞と動詞の間にも、互いに性質を共有している面があり、「動詞から名詞」へ、または「名詞から動詞」へと変わることも考えられる。この変わるということのは、形式的な面だけではなく機能、意味の面においても同様である。このような観点から(1)と(3)の前項を分けてみると次のようになる。

- (5) 純粹な名詞、または物事の名前としての名詞
(6) 動詞の連用形、または行為、過程、状態の名前としての動詞

また、この二種類の名詞に実際の名詞をふり分けてみると次のようになる。

- (7) 赤、後、秋、種、目、初、雲、旅、健康、学校、表記、創立
(8) 空き、笑い、喜び、走り、勝ち、騒ぎ、続き、思い、読み、掛け

(7)の「表記」、「創立」などは「～する」が付くことによって、動詞性を表しているし、(8)は動詞の連用形によって、名詞になることがある。このように名詞の類の中にも動詞的性質をもっているものがあり、動詞の類の中にも名詞的性質をもっているものがあると考えられる。しかし、動詞連用形のすべてがそのまま名詞になるのではなく、むしろ名詞としてつかいにくいものがある。

- (9) 見、来、着、出、言い、聞き、取り、待ち、書き、褒め、出し、突き

(9)のような名詞形は単独ではなく、他の語と結合して、複合語として現れることが多い。

- (10) 見事、行き来、着替える、出入り、言い消す、聞き直す、取り捨てる、待ち続ける、書き取る、褒め立てる、出し切る、突き刺す

また、複合動詞としては成立しない語の中でも、複合動詞連用形名詞になるものも多数存在する。

- (11) 読み書き(*読み書く)、飲み食い(*飲み食う)、立ち食い(*立ち食う)、

貸し借り(*貸し借りる)、生み立て(*生み立てる)

(11) の例とは反対に、複合動詞の中には連用形の形で、そのまま名詞形にならないものもある。

(12) 言い終わる(*言い終わる)、囃し立て(*囃し立て)、乗り出す(*乗り出し)、断ち切る(*断ち切り)、書きまくる(*書きまくり)

このように、動詞連用形名詞の形にも複合動詞の形にもさまざまなタイプが存在し、結合関係をもっていることがわかる。成立関係においては、次の二つの要因が考えられる。

- ① 語構成プロセスの問題～それぞれ異なる形態から構成されている。
- ② 語構成結合関係における意味的制約

①の場合は、例えば「立ち食い」は「立ち食う」の連用形ではなく、「立ち+食い」の結合プロセスであり、②の考えは、結合関係においても意味によって制約されることである。

以上のような考えから、本論では「複合動詞前項要素の名詞化」が複合動詞全体において意味的に、形式的にどのような影響を及ぼすのかを探ってみたい。まず、「複合動詞前項要素の名詞化」の定義を整理する。

1. 動詞連用形の名詞化

日本語の場合、動詞連用形の形としてそのまま体言としての役割をし、また語構成においては生産性が高いと言えよう。動詞連用形の名詞化については色々な角度から研究が行われ、主なのは次のようなものである。

- (13) 動詞連用形名詞化の機能的研究【西尾寅弥(1988) など】
- (14) 動詞連用形名詞の意味についての研究【宮島達夫(1956) など】
- (15) 複合動詞の連用形の可否に関する研究【石井正彦(1984) など】

(13)、(14)、(15) 以外にも、認知的な立場からの研究【徂住彰文(1989) など】もあるが、複合動詞の前項動詞の役割としての「動詞連用形の名詞化」についての研究はほとんど見られない。

意味的な面では、「動く」に対し「動き」は「動くこと」というような解釈

で、次のような分類がある。

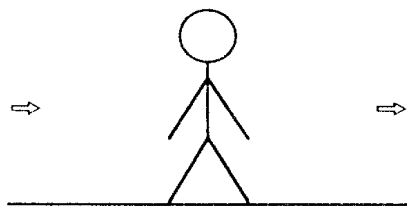
(16) 宮島達夫 (1956、1957) (注1)

- | | |
|--------------|---------------------|
| ① ～すること | ①' ～したありさま |
| ② ～するもの | ②' ～した(結果できあがった)もの |
| ③ ～する人 | ③' ～した(ありさまにある)人 |
| ④ ～する(ための)道具 | |
| ⑤ ～するところ | |
| ⑥ ～するとき | |
| ⑦ ～されるもの | ⑦' ～された(結果できあがった)もの |

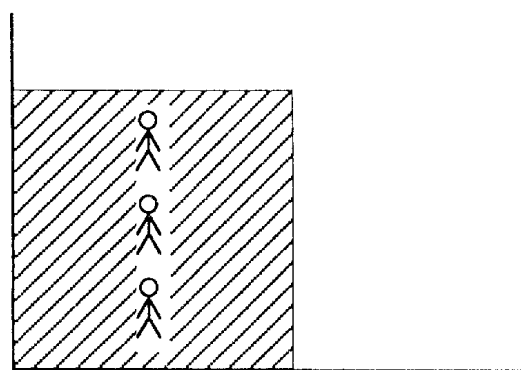
以上のような意味の分類は、もちろん単独で使われる時の意味分類ではあるが、品詞転成が行われても、本来の意味をそのまま受け継いでいる特徴が指摘されよう。

このような動詞連用形名詞の意味の分類に対して、次のような場合を考えてみたい。動詞「歩く」の連用形は「歩き」であり、(16)の宮島(1956、1957)の分類からすると①の「歩くこと」とか「歩きしたありさま」になるだろう。しかし、これは平面的な解釈であって、時間的な側面は考慮していない。それに、時間的な側面を付け加えると次のようになる。

(17) 「歩く」



(18) 「歩き」



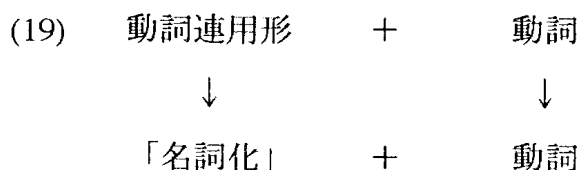
このような考え方は、ラネカーの認知的な処理によるもので、時間の流れをどのように扱うかによって「逐時的 (sequential)」と「総括的 (summary)」に分けるものである (注2)。これによると、「歩く」という表現は「歩くありさまを逐時的に変化する場面の連続として捕らえる時のこと」で、「歩き」という表現は「歩く動作の開始から終了までの場면을蓄積してひとまとめにして扱うこと」になるという。

ここで問題にしたいのは、複合動詞における構成要素 (ここでは前項要素) としての「動詞連用形の名詞化」を中心とするので、(17)、(18) のような観点を参考にしながら、語構成関係に焦点を当てることにする。

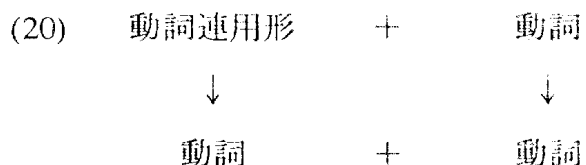
本論は、複合動詞における語構造分析の方法として「動詞連用形の名詞化」(前項動詞) という問題に着目しているが、ここで「動詞連用形の名詞化」という概念を整理しておく必要がある。「名詞化」の意味から分かるように、名詞になることではなく、名詞的な役割、特に他の構成要素と結合するに際して、そのような役割をすることをいう。「名詞化」というのは、意味の面での名詞的な役割であり、名詞という品詞性とはまた異なる側面である。

特に、複合動詞のなかでは語構成要素レベルで扱うため、品詞の区別そのものは問題とならない。また、動詞連用形が名詞形に転成することはあってもその名詞形が動詞的性格を失うことは考えにくい。むしろ、統語的な観点からは同じ機能をもっていると言える。

ここでいう前項動詞の「名詞化」というのはある面では便宜的な用語であり、その名詞化によって行われる意味的变化に焦点を当てるのである。これによると「名詞化」の可否によって、意味の特殊化、抽象化、形式化が行われ、また形式的には後項要素によって意味の限定が行われることがある。複合動詞語構成における「名詞化」のプロセスを図式化すると次のようになる。



一方、複合動詞前項がすべて名詞化するのではなく、次のような形式も当然考えられる。



すなわち、複合動詞の前項要素には意味的な観点から「名詞化する」と「名詞化しない」と二種類に分けて考えることにする。

2. 構成要素「たてる」の分析

2-1. 「たてる」の語構成

「たてる」を構成要素とする複合語は、次のような種類が考えられる。

(21) 前項要素

- ① 立て＋名詞： 立て板、立て文、立て坑、立て付け、立役者
- ② 立て＋形容詞： 立てにくい、立てやすい
- ③ 立て＋動詞： 立て替える、立てこもる、立て通す、立て直す

(22) 後項要素

- ① 名詞＋立てる： 泡たてる、逆立てる
- ② 動詞＋立てる： 積み立てる、褒め立てる、泣き立てる
- ③ 形容詞語幹＋立てる： 荒立てる

2-2. 「立て」と「立てる」との関係

「立てる」の動詞連用形名詞「立て」は、その品詞の転成により、意味の面でも特殊化されることがある。次のような例である。

(23) 「立て＋名詞」の形として、第一人者を表す

立役者、立て三味線、立て行司、立て作者

(24) 「数量詞＋立て」の形として項目、種類等を表す

三本立て、四頭立て、八挺立て

(25) 「数詞＋立て」の形として回数を表す

三立て

(26) 「名詞、動詞の連用形、形容詞語幹＋立て」の形として特に強調を表す

隠し立て、とがめ立て、かばい立て

- (27) 「動詞連用形+立て」の形として「したばかり」の意を表す
生み立て、焼き立て、出来立て、作り立て、もぎ立て

2-3. 複合動詞「-たてる」の分析

動詞構成要素(ここでは後項要素)「-たてる」の分析の前に、「立てる」自体の意味について考える必要がある。日本語基本動詞用法辞典(1989)によると、「校庭に旗を立てる」のように「たてにまっすぐの状態にする」のが基本義とされている。この「まっすぐ」は動作にも、状態にもとることができる。

- (28) 「立てる」の基本義: たてにまっすぐの状態にする

このような基本義をもつ「立てる」が語構成要素になると、どのような意味用法として変化するのか。後項要素「-たてる」をもつ複合動詞を分析した結果、次のように大きく二つに分けることができる。この意味的な分類は、意味自体の細かい分類ではなく、後述するように意味の面からの「名詞化」によって大別された二分法である。

- (29) 「-たてる」が確立、完成、結果の出現などの意を表す。

(29) のような例では次のような複合動詞が考えられる。

- (30) 埋め立てる、組み立てる、積み立てる、書き立てる(項目を一つ一つ書き立てる)、作り立てる、突き立てる(突いて立てる)、磨き立てる、飾り立てる、塗り立てる、打ち立てる、数え立てるなど

- (31) 「-たてる」が強調化され、激しい状態を表す。

(31) のような例は次のような複合動詞が考えられる。

- (32) 突き立てる(激しく突く)、あおり立てる、洗い立てる、書き立てる(目立つように盛んに書く)、言い立てる、騒ぎ立てる、しゃべり立てる、褒め立てる、責め立てる、泣き立てる、まくし立てる、囁し立てる、吠え立てる、せがみ立てる、急き立てるなど

3. 「動詞連用形の名詞化」と複合動詞の分類

「一立てる」を構成要素とする複合動詞を分析してみた結果、意味の面から(29)の「縦になる動作性から確立、完成、結果の出現」と(31)の「強調化され、激しい状態を表す」の二つの種類があることが分かった。

しかし、これはあくまでも意味による分類であり、その区別の基準を立てなければならない。その基準として考えたのが、前項動詞が連用形によって「名詞化する」か「名詞化しない」かである。

これによると、(30)のような例では「一たてる」の前項動詞が動詞の連用形でありながら、「名詞化」しないで動作動詞の役割を果していると思われる。

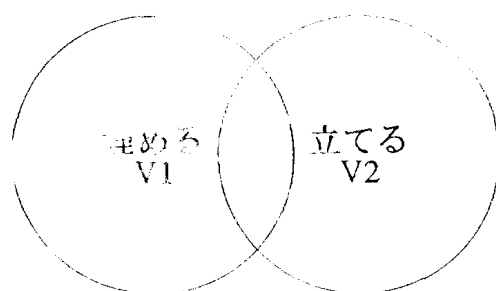
反面、(31)のような例では、「一たてる」の前項動詞が動詞連用形になり「名詞化」するものと思われる。

このようなことは次のように分類される。

- (33)
- | | | |
|-----------|---|-------------|
| 複合動詞の前項動詞 | ┌ | 名詞化する (31) |
| | | 名詞化しない (29) |

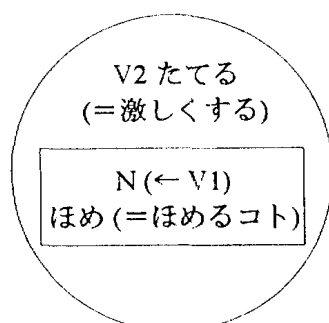
(29)、(31)を図式化すると次のようになる。

(29)'



(V1: 前項動詞、V2: 後項動詞)

(31)'



(N: 動詞連用形の名詞化したもの、V: 後項動詞)

(29) と (31) の区別の手順として、次のような方法を考える。

- (34) 「て形への置き換え」：前項動詞と後項動詞のあいだに「て形」の介入が可能かどうかの基準である。もちろん、この「て形」には「順次性」、「累可」、「並列」、「同時進行」などさまざまな用法があるが(注3)、ここでは包括的に使う。包括的という意味は、複合動詞結合関係における内的関係に限られており、実際に「て形」でつなげるかどうかの問題とは違う側面をもっている。

(34)-① 名詞化しない: (29)

埋め立てる	⇒	埋めて、立てる
組み立てる	⇒	組んで、立てる
積み立てる	⇒	積んで、立てる
書き立てる	⇒	書いて、立てる
作り立てる	⇒	作って、立てる

(34)-② 名詞化する: (31)

突き立てる	⇒	*突いて、立てる (突くコトヲ激しくする)
あおり立てる	⇒	*あおって、立てる (あおるコトヲ激しくする)
泣き立てる	⇒	*泣いて、立てる (泣くコトヲ激しくする)
言い立てる	⇒	*言って、立てる (言うコトヲ激しくする)
騒ぎ立てる	⇒	*騒いで、立てる (騒ぐコトヲ激しくする)
喋り立てる	⇒	*喋って、立てる (喋るコトヲ激しくする)

- (35) 「～をする形」への置き換え：前項動詞が名詞化しない場合は、複合動詞全体が動詞連用形名詞になり、「～をする」を付けることができる。前項動詞が名詞化する場合は、複合動詞としては動詞連用形名詞にならない傾向がある。

(35)-① 名詞化しない: (29)

埋め立てる	⇒	埋め立てをする
組み立てる	⇒	組み立てをする
積み立てる	⇒	積み立てをする
書き立てる	⇒	書き立てをする

並べ立てる ⇨ 並べたてをする

(35)-② 名詞化する: (31)

あおり立てる ⇨ *あおり立てをする

騒ぎ立てる ⇨ *騒ぎ立てをする

責め立てる ⇨ *責め立てをする

褒め立てる ⇨ *褒め立てをする

泣き立てる ⇨ *泣き立てをする

言い立てる ⇨ *言い立てをする

囃し立てる ⇨ *囃し立てをする

4. まとめと課題

以上のように、複合動詞構成要素(後項動詞)「一立てる」を例として分析した結果、複合動詞の前項動詞には意味的な面で「名詞化する」と「名詞化しない」の二種類があり、その特徴は次のような表にまとめることができる。

【表】

後項「立てる」 の意味	激しくする (強調化)	確立、完成 結果の出現
前項動詞	名詞化する	名詞化しない
て形への 置き換え	不可能	可能
複合動詞 連用形の 名詞化	不可能	可能
語例	見立てる あおり立てる 言い立てる 囃し立てる 騒ぎ立てる 述べ立てる ほめ立てる しゃべり立てる 吠え立てる	組み立てる 打ち立てる 積み立てる 埋め立てる 書き立てる 飾り立てる 取り立てる 並べ立てる 数え立てる

今後の課題としては、これを一般化するためにはより多くの複合動詞を分析する必要があると思われる。

さらに、意味の面では「比喩的」使い方の複合動詞の処理の問題がある。

本稿では「名詞化」を、意味の面から複合動詞の語構造を分析する基準としたが、今後より綿密な分析が行われることに期待したい。

注

1. 斎藤倫明、石井正彦編、『語構成』、p.309による。
2. 認知文法では、統語カテゴリ間の違いをもたらす心理的実体の分析を、まず、名辞的 (nominal) と関係的 (relational) という意味的対立をたてることから始める。また関係的には過程的 (processes) と非時間的 (atemporal) に分けられる。ラネカーはさらに、認知的処理が時間の流れをどのように扱うかについて、逐次的 (sequential) と総括的 (summary) という対立を立てる。
3. 森田良行 (1995)『日本語の視点 —— ことばを創る日本人の発想 ——』p.255～267を参照されたい。これによると「～て形」の用法には順次性、累可、並列、同時進行などがある。ここでは複合動詞内部における結合関係を問題にするので、これとはまた異なる立場である。

参考文献

- O. イェスベルセン (1924)『文法の原理』日本語訳 1976、岩波書店
 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
 影山太郎 (1996)『動詞意味論 —— 言語と意味の接点 ——』くろしお出版
 斎藤倫明 (1992)『現代日本語の語構成論的研究 —— 語における形と意味 ——』ひつじ書房
 斎藤倫明 (1995)「語彙素とその意味」『日本語学』5、明治書院
 斎藤倫明 (1996)「語構成と意味との関わり —— 「単語化」という形態論的プロセス ——」『国文学 解釈と教材の研究』9、学燈社
 斎藤倫明、石井正彦編 (1997)『語構成』ひつじ書房
 往住彰文 (1989)「動詞は何を表すのか —— 動詞が担う人間の認知と思考 ——」『月刊言語』9、大修館書店
 西尾寅弥 (1988)『現代語彙の研究』明治書院
 宮島達夫 (1978)『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 43) 秀英出版
 村木新次郎 (1996)「意味と品詞分類」『国文学 解釈と鑑賞』1、至文堂
 森田良行 (1977)『基礎日本語』角川書店
 森田良行 (1996)『意味分析の方法 —— 理論と実践 ——』ひつじ書房

—— 東北大学大学院生 ——